

ウイグル文字モンゴル語に見える漢語語彙の表記

中村雅之

13～14世紀のウイグル文字モンゴル語の文章には漢語語彙を含むものが少なくない。それらのうち14世紀の資料に見える漢語語彙の表記は、全体としてみれば非常に均質的なものである。そしてその表記法は元朝の公用文字たるパスパ文字のそれと基本的に一致すると言ってよい。いま多量の漢語語彙を含む1335年の蒙漢対訳碑文(張氏先塋碑)からいくつかの語彙を拾うと以下の通りである。[転写はLigeti(1972)に従うが、補助記号は省略する。]

皇太后 qong-tai-qiu	散官 sangon
柱国 čúgui	河南 qonam
提点 titem	仲賢 čung-ken
天曆 tenli	江北 geng-bui

これらの表記がパスパ文字と基本的な音形を共有することは、双方が元代の漢語音を表していることを考慮すれば、一見当然のことにように思われる。しかし、同時代のウイグル文字ウイグル語における漢語語彙の表記、あるいはパスパ文字公布以前のモンゴル語文における表記は、いささか様相が異なるのである。

元代のウイグル語訳『観無量寿経』(ツィーメ・百濟1985による)には「白蓮(pay lin)」「蓮華(linxu-a)」のように「蓮」が「lin」と表記されている。ウイグル文字ウイグル語における漢語表記には唐末以来の伝統があるとは言いながらも、「白」がかつての「paq」ではなく「pay」と表記されていることから、この表記が元代漢語(少なくとも近世漢語)を反映していることがわかる。にもかかわらず、元代漢語で/lien/であった「蓮」を「lin」と表記するのは、ウイグル語文における一つの特徴と言ってよい。元代ウイグル文字モンゴル語(確認できるのは実質的には14世紀のものに限られる)においては通常この韻母は「-en」である。(ex.天「ten」、賢「ken」)

同様にパスパ文字公布(1269年)以前のモンゴル語文における漢語表記も、それ以後の表記とは異なっている。1335年の碑文で「qonam」と記された「河南」は、中村・松川(1993)によって研究された1268年の聖旨では「qanam」である。「qanam」は中古音的な音形であり、ウイグル語における漢語表記の伝統を引き継いだものと見るべきである。同聖旨の「店(dim)」もウイグル語文の漢語表記を踏襲したものと考えられる。「店」と同音(声調を除く)の「点」は1335年碑文では「提点(titem)」のように「tem」であり、元代ウイグル文字モンゴル語としては、韻母/-iem/をもつ漢語語彙は「-em」と表記されるのが通例であったと考えられる。(上述の/-ien/→「-en」と平行関係にある。)「解典庫」は1261年聖旨で「geiṭenkúú」、1268年聖旨で「geidinkúú」であり(いずれも中村・松川1993による)、「典」の表記に揺れが見られる。後者がウイグル語風の綴りということになる。

以上から、パスパ文字公布以前のモンゴル語文における漢語表記は、おおむねウイグル語文の漢語表記の影響を強く受けたものと考えられる。そしてウイグル語文においては、パスパ文字公布の後も漢語表記の方法に全面的な変更はなかった。ところがモンゴル語文の場合には、パスパ文字公布以後は、それまでのウイグル語風の漢語表記からパスパ文字風の綴りへと変わったのである。

パスパ文字公布以前のモンゴル語が極めてウイグル色に満ちていることは、中村・松川(1993)

で詳しく述べられている。上では漢語語彙においても同様であったことを確認したわけである。それではパスパ文字公布以後に、漢語語彙の表記がパスパ文字風に変わるの、いかなる理由によるのであろうか。この改変はパスパ文字と同様に、規範的な正書法として施行されたのであろうか。以下に述べる2つの事実から、そのような規範はおそらく存在しなかったと思われる。

その1、ウイグル語とモンゴル語で表記が異なること。上述のように、漢語の韻母/-ien/はウイグル語とモンゴル語の文章中ではそれぞれ「-in」と「-en」である。もしもウイグル文字の漢語語彙表記に何らかの規範化がなされたとすれば、双方が同じ表記になっていることが期待される。パスパ文字による漢語表記は漢語を記す場合も、モンゴル語聖旨などに見える漢語語彙の場合も、同じ表記法に従っている。もしウイグル文字において規範となる漢語表記法があったとすれば、ウイグル語とモンゴル語とを問わず、共通の表記が用いられた可能性が高い。前述のウイグル語訳『観無量寿経』はツィーメ・百濟(1985)によれば「巉巉」なる人物(トルコ系のカングリ族)によるものであるが、漢蒙対訳の1335年碑文にも碑文作成に関わった者たちの中に同じ人物の名が見える。モンゴル語訳が巉巉の検閲を経ていたかどうかは判らないが、同じ人物に関わった文章において、ウイグル語とモンゴル語で漢語語彙の表記法が異なっているのである。

その2、同一碑文においても表記に揺れが見られること。1335年碑文において、「大夫」に対して「daiyu」と「dai vuu」の2種の表記が見える。連書する時と分ち書きする時で綴りが異なっている訳であるが、同様の例は多数ある。規範化がなされたとすれば起こりにくいことである。また、同碑文の「徽」は「徽政院」においては「kui」、「洪徽局事」においては「qui」である。漢語の「h」はウイグル文字では「k」か「q」で表記されるが、同じ一つの文字においてさえ揺れが見られるのである。

以上から、ウイグル文字の漢語表記にはパスパ文字におけるような規範はなかったと考えるべきである。しかし、ここでまた問題は振出しに戻ることになる。すなわち、元代の(あるいはパスパ文字公布以後の)ウイグル文字モンゴル語における漢語語彙の表記は全体として非常に均質的なものであり、かつパスパ文字の表記に近いものになっているが、それはなぜか。この問いに対するもっとも穏当な答えは、正式な規範はなかったがパスパ文字による表記が間接的な規範として機能していた、というものである。

パスパ文字の制定はモンゴル帝国における言語政策の一大事業と言うべきものであった。その際、その文字による各言語の表記法を定めるにあたっては複数の専門家による入念な検討がなされたはずである。その結果、パスパ文字モンゴル語の文章を記す際にも、そこに現れる漢語語彙は全てパスパ文字漢語の表記法によって記されることになった。つまり、漢語以外の言語を記す場合でも、ひとたび漢語語彙が記される際には一々その規範を確認せざるを得ないことになった。そのような作業に慣れた人々にとっては、ウイグル文字モンゴル語を記す際にも、その中に漢語語彙を表記しようとするならば、パスパ文字漢語を仮定の規範として利用するのは自然なことであったと思われる。ウイグル語文の場合には、漢語表記においても長い伝統があったため、近世漢語の表記は伝統表記の微調整にとどまったが、モンゴル語文においては漢語表記の伝統が浅かったため、パスパ文字の影響を強く受けたのであろう。そのために現在我々が目にする多くのウイグル文字モンゴル語碑文では、漢語語彙のほぼ均質的と言える表記が確認されるわけである。

・Ligeti(1972), *Monuments Préclassiques I*, Budapest.

・ツィーメ・百濟(1985)『ウイグル語訳の観無量寿経』、永田文昌堂。

・中村・松川(1993)「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』VIII。